『鳥獣害を知って防ごう』

間野　勉 監著

2020 年 7 月
北海道協同組合通信社 発行
113 頁
定価（本体 1,333 円＋税）

林　美穂・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学類）

日本野生動物医学会の創立前後の 1990 年代中頃，保護 vs 救護の論争が，舌鋒凄まじく交わされていた。同じ漢字の「護」が付されるので，紛らわしいことこの上無し。加えて，一般には保護と救護とが同じ意味として捉えられ，当然ながら，イノセントな獣医大学の新入生すら混同。コアカリ野生動物学では，保護管理と傷病救護リハビリが用意されるが，獣医学教育では後者はアドバンスト扱いなので（動物看護学では双方必須；浅川，2020ab），明確に峻別できうるのかどうか心許ない。野生動物問題化が複雑・多様化している今日，獣医師（学）に，ますます期待される状況が醸成されているのだが…。そのような場で活躍する人材プールの 1 つが，地方自治体で野生動物対応する公務員である。今回，本書を扱う者（林）は，どちらかと云うと傷病救護に志向性を示しつつ，就業としては保護（管理）も念頭に置く北海道生まれの新人ゼミ生である。したがって，第一線の専門家（後述）による鳥獣被害対策マニュアルの読み込みは，この学生にとって未来への投資となろう。　（文責 浅川）

本書は北海道における野生鳥獣による農業被害とその対策について書かれたものである。まず，序文には道内各地域を農業形態によって分類し，その地域ごとの鳥獣被害の特徴が説かれ，以下，本文は次のような章構成であった；第 1 章 エゾシカ，第 2 章 アライグマ，第 3 章 カラス，第 4 章 ヒグマ，第 5 章 技術と制度。4 つの章については，それぞれ当該動物の分布と生態，被害の現状，対策モデル事例について解説書されていた。最終章では防除

や捕獲に用いる柵・わなの種類とその特徴，止めさし，被害調査手法のほか，鳥獣被害防止総合対策交付金・狩猟免許制度についての説明がされていた。特に，錯誤捕獲防止機能を有した箱わなの紹介もあり，とても興味深かった。全体を通じ図表が豊富で，文章の表現も分かり易かった。以下に，各章の動物で（林が）注目したことを列挙する。

エゾシカ（シカ）：数多の農林業被害，生物多様性への悪影響，踏みつけによる土壌流出，交通事故によるヒト・車輛の死傷・損傷等々，幅広く多様な被害を再認識した。現在，シカ肉・皮・角の有効活用にあたり，捕獲個体を半年から約1年間，飼育され，その後後に出荷されるという。また，シカ捕獲認証（DCC）についても初めて知った。

アライグマ：3月から5月の出産期に流産等で，何らかの原因で子供を失ってしまうと，再度交尾し晩夏から秋にかけてまた出産できるという。また，捕獲は作物の収穫期よりも春季のほうが子を持つ雌個体を容易に捕獲できて効果があるという。この考えは他の動物にも適用できるはずだ。道外ではニホンザルやイノシシによる被害が多く，比較的，アライグマに対する関心が薄いという記述も驚かされた。特定外来生物のアライグマは狩猟免許が無くとも一定の講習を受けることで捕獲資格を得ることができる制度も推進されている。私（林）も，一昨年にアライグマ捕獲講習を受けたことがあるが，わなを設置できるのが自分の所有する土地に限るという制限があり，農業従事者ではない私（林）には，残念ながら実際の設置は未経験であるが。いずれにせよ，農業従事者の皆さんに捕獲の担い手になってもらうことが重要である。なお，道内ではアライグマと混同され易いのがタヌキで，その比較写真があると，より親切であったと思う。

カラス：道内ではシカに次いで鳥獣被害が多いのはカラス類で，また，家畜への危害（嘴による突き，感染症媒介等）を与えるのもカラス類が約70%を占めるという事実に驚いた。カラス類は他の動物に比べて捕獲数が少なく，その分，被害額が増加しているという。防鳥ネットを用いても，牛舎内作業に支障が出るなどし，防鳥対策は模索が続いているようで，まず，牛舎への誘引防止が先決と感じた。箱わなによる有害捕獲も初めて知った。

ヒグマ：駆除ではなく，問題グマを作らない取り組みの方が重視される点で他とは異なる。人間との軋轢が増加していて毎年人身事故が起きているという記述があり，問題グマを増やさないため，農畜産・水産廃棄物の適切処理や柵設置などが推奨されている。が，増加の背景には人間とヒグマとの間の距離が近くなっていることにもあるのではないだろうか。特に，知床では観光客が車から降りてヒグマに過剰に接近しているという話を良く見聞きするため，その対策も併せて実施しなければ道東での被害は減らないだろう。（文責 林）

本書は創刊から約70年の歴史を擁する北海道の農業専門誌『ニューカントリー』（酪農学園大学関係者としては『デーリィマン』の姉妹誌という方が通じる）の特集号として編纂された。26名の第一線に立つ執筆者を擁し，大変豪華な書ではあるものの廉価なのはそのような理由からである。しかし，あくまでも雑誌の体裁なので，大学予算項目分類上，消耗図書扱いとなるが，永久保存版にすべき資料である。なぜならば，ここで扱われた野生動物問題が，収束する兆しがまったく無いからである。事例は畜産業を含む農業被害であるが，淡水魚養殖の場，家屋進入，在来種保護などでも参考になる。また，北海道を対象にしているが，道外事例でも応用できうる（註：各記述の中で道外関連事例も掲げられている箇所も有り）。大変嬉しいことに，執筆者には浅川が運営する酪農学園大学野生動物医学センターWAMCを拠点に調査研究された方や2020年3月まで顧問を務めた公認サークル野生動物生態研究会出身の方も含まれた（ちなみに，この書籍紹介の筆頭，林もこの研究会出身）。（文責 浅川）

引用文献

浅川満彦. 2019a. コアカリ「野生動物学」現行教育内容に関しての検討事項. *野生動物医学会ニュースレター Zoo and Willife News*（48）: 9-11.

浅川満彦. 2020b. 認定動物看護師教育カリキュラムにおける野生動物学の教育概要と課題－応用動物看護学の新刊教科書を題材に. *野生動物医学会ニュースレター Zoo and Willife News*（50）: 13-16.